

漱石の「門」の世界

山本勝正

一

「門」は次のような会話で終わる。

宗助は家へ帰って御米に此鶯の問答を繰り返して聞かせた。御米は障子の硝子に映る麗かな日影をすかして見て、

「本当に難有いわね。漸くの事春になつて」と云つて、晴れ晴れしい眉を張った。宗助は縁に出て長く延びた爪を剪りながら、

「うん、然し又ぢき冬になるよ」と答へて、下を向いたまゝ、鋏を動かしてゐた。(二三)

この宗助と御米の会話は一見何の変哲もないとみられるかもしれないが、作品「門」を論ずるに当つてこの会話の意味を考える事は重要であると考えられる。その理由については暫く措いて、最近の「門」論に於て、この会話は如何なる形で評価されているかを考えてみたい。例えば越智治雄氏は、

「門」は宗助と御米の次の対話で閉じる。「本当に難有いわね。漸くの事春になつて。」「うん然し又ぢき冬になるよ。」(二二)

三〇〇〇文字どおり小康に恵まれた夫婦のさやかな幸福や不安は、春の陽光に包まれているのである。したがってこの対話も、「もう天気も好くなったから。」⁽¹⁾「だつて又降ると困るわ。」⁽¹⁾「六〇」というのときほどの違いはないので、どちらにも流れているのはまさに人の生きて死ぬ同じむなししい時間である。

と述べられている。また熊坂敦子氏は、

御米が「本当に有難いわね。漸くの事春になつて」と言ったことに對し、宗助は「うん、然し又ちき冬になるよ」と答えたことは、絶え間ない自然のめぐりを表わし、非情な季節の到来を告げている。御米は木々の芽の萌え出でる春を待っているに比し、冬を予想する宗助の心境は、乾いてしまっている。／世の中は片付かなければ片付かないままに、日常生活は果しなく過ぎてゆく。人間は自然のめぐりと共に在り、不安に曝され、そして生きてゆかねばならないのである。⁽²⁾

と述べられ、越智氏とは全く違つた見解をとつておられる。更に平岡敏夫氏は、

「門」における冬の自然は、安井の再登場ということと宗助を追いつめることに照応しているが、安井が去ると、春がやってくる。お米がすかし見る、日曜日の「障子の硝子に映る麗らかな日影」は、冒頭の「綺麗な空」に照応しているが、冬が来て安井があらわれたごとく、「漸くの事春になつて」も、「又ちき冬になる」だろう。それは人間の主体・行為によつてどうなるものでもない。いつまでも人間は結果（暗黒）から逃がれることも、それを超えることもできない。漱石は宗助、お米のような「自覚」せざるを得なかつた人間を、一方では、いとおしむ心をも抱いている。自己もそれにほかならぬ人間である以上は。⁽³⁾

と述べられている。平岡氏の意見は、越智氏の意見とは違い、熊坂氏の意見にかなり近い見解をとつておられる。この作品の最後にある夫婦の会話に對する三氏の見解をまとめ、その相違について若干の検討を試みたい。まず越智氏はこの夫婦の会話を普通の日常的な会話と考えられ、何ら深い意味が無いと解されている。これに對し熊坂氏は、この夫婦の会話に、御米に比して宗助の孤独を、そして日常生活の不安をみられている。また平岡氏はこの夫婦の会話

に、不安にさらされている人間の姿をみられ、氏の熊坂氏と違う点は、宗助と御米の関係に対する視方にあるといえよう。より詳しくいえば、熊坂氏は御米に対する宗助の孤独を問題にしておられるのに対し、平岡氏は宗助と御米を、漱石が同様の人間として描いていると考えられているのであり、そこに両氏の相違があるといえよう。これら三氏が、作品「門」に対して、それぞれ違った視方をされているのは当然であるが、この夫婦の会話に対する見解の相違は、その一つの顕著な例として挙げる事ができる。しかもこの場合かなり重要な意味を持つ例としてである。それが如何なる意味に於て重要であるかは、この作品を論ずる過程に於て明白になることであるので、ここでは直接触れない。ともかく私はこれら三氏の意見のうち、熊坂氏の意見に最も近い立場である。それは何故であるのか、また何故に、平岡・越智氏の解釈に従い難いのであるかという事を、以下の論考の中で、この夫婦の会話の持つ意味の重要さと共に、考察することにより、「門」の作品構造の分析を試みたい。

註(1) △門▽ 越智治雄 吉田精一編 「夏目漱石必携」学燈社 一三四頁 昭和四三年四月

(2) △門」の世界▽ 熊坂敦子 「言語と文芸」 七十五号 東京教育大学 三〇頁 昭和四六年三月

瀬沼氏はその著「夏目漱石」(東京大学出版会、昭和三七年三月)に於て、ほぼ同様の見解をとっておられる。

(3) △門」の構造▽ 平岡敏夫 「言語と文芸」 七十五号 東京教育大学 四二頁 昭和四六年三月

また米田利昭氏は△門」の鑑賞「漱石二題上」(『日本文学』一八巻七号、日本文学協会、一七頁、昭和四四年七月)に於てほぼ同様の見解をとっておられる。ともかく「言語と文芸」七十五号(夏目漱石特集)の二つの「門」論、即ち熊坂氏、平岡氏の「門」論に於て、この夫婦の会話が問題になっていること自体、この会話の作品中に於ける意味の重要性を間接的に証明しているといえよう。

「門」は、「三四郎」「それから」の後を承けて、明治四十三年三月一日から六月十二日迄、一〇四回に亘って、東京、大阪両「朝日新聞」に連載された。

「門」には、人間の罪と日常性の關係という問題を中心に、宗助と御米という姦通をした夫婦の生活が描かれているといえよう。一般にいわれている如く、「門」は「三四郎」「それから」と共に、中期三部作を構成している。作品「三四郎」の主人公が小川三四郎であり、「それから」の主人公が長井代助である如く、この作品「門」の主人公は野中宗助である。これら三人の主人公の人間像の系譜の中に、中期三部作成立の根拠を窺うことができるが、その事は一まず措くとして、この「門」の作品世界を、野中宗助の人間像を中心に解明していきたい。

野中宗助の人間像を考えるに当って、便宜上、作品中に描かれている宗助を、単に時間的配列でなく、彼の人生觀を基軸として、次の四つの時期に分けて考えてみたい。まず第一の時期は、彼の大学生の時代であり、安井と友達であった時である。第二期は、彼が安井の妻御米を奪ってから、二人で崖下での侘しい生活を送っている時期であり、この小説の大半を漱石はこの時期の描写に当てているのである。そして第三期は、急に安井の話聞いたことによつて生じた精神的危機を克服せんが為に參禪する時期であり、時間的にいってほんの少ない間であるが、宗助の精神が、その根底に於て、大いに揺すぶられた時である。そして第四期は、參禪後であり、小説の中では、少ししか描かれていないが、第一期から第二期、第三期、そしてこの第四期と変化してきた宗助の考え方の一つの到達点を示している時期であり、これからの彼の在り方を示すといったような意味に於て、この時期の宗助の人間像を究明すること

は最も肝要であると考えられる。

宗助の大学時代について、漱石はどのように描写しているであろうか。その箇所を拾ってみると次の多くである。まず、

彼の未来は虹の様に美しく彼の眸を照らした。(一四)

であり、また、

彼は暖かな若い血を抱いて、其熱を冷す深い緑に逢へなくなつた。(同)

であり、また、

其時分の宗助の眼は、常に新しい世界にばかり注がれてゐた。(同)

であり、また、

今の宗助なら目を眩しかねない事々物々が、悉く壮快の二字を彼の額に焼き付けべく、其時は反射して来たのである。(同)

であり、そして、

彼の未来は封じられた蕾のやうに、開かない先は他に知れないばかりでなく、自分にも確とは分らなかつた。宗助はただ洋々の

二字が彼の前途に柵引いてゐる気がした丈であつた。(同)

であり、最後に、

彼は斯うして新しい所へ行つて、新しい物に接するのが、用向の成否に關はず、今迄眼に付かずに過ぎた活きた世界の

断片を、頭へ詰め込む様な氣がして何となく愉快であつた。(同)

という表現を挙げることができる。

作品「三四郎」に於ける主人公小川三四郎と、この時期の宗助は非常に似通つているといえる。小川三四郎は八大

いなる未来▽を有している人間であることは既に述べたところであるが、もう一度簡単に「三四郎」に於て、漱石が小川三四郎を如何に表現していたかを見てみたい。彼は「自分が此世界のどこかへ這入らなければ、其世界のどこかに欠陥が出来る様な気がする」(『三四郎』四)と考え、また「自分は此世界のどこかの主人公であるべき資格を有してゐるらしい。」(同)と考え、また「円満の発達を翼ふべき筈の此世界」(同)を考え、そして、

三四郎は切實に生死の問題を考へた事のない男である。考へるには、青春の血が、あまりに暖か過ぎる。眼の前には眉を焦す程な大きな火が燃えてゐる。其感じが眞の自分である。(同一〇)

と考える。こう見てくると、大学時代の「門」の野中宗助が、作品「三四郎」の主人公である小川三四郎と如何に近いかということがよく分るのである。現実世界に位置づけられていない、大学時代の宗助は、三四郎と同じく△大いなる未来▽を有している青年であり、漱石が、宗助という人間の造型にあたり、三四郎を意識していたことはほぼ間違いないと思われる。また「三四郎」の主人公と「門」の主人公が似通っていること自体、「三四郎」と「門」の有機的関連性を裏付けているのではないだろうか。ともかく学生時代の宗助が、今引用した文中にある△虹の様に美しい未来▽△暖かな若い血▽△新らしい世界▽△壮快▽△封じられた蓄のような未来▽△洋々▽△新らしい所▽△新らしい物▽という表現のイメージする所によつても明白な様に、三四郎と同じく△大いなる未来▽を有している人間であるという事をはつきりと認識しておく必要がある。

註(1) 拙稿△「三四郎」の世界▽「TON」第六号 △漱石文芸研究▽ 関西学院大学 S C A 文学研究グループ 昭和四五年一二月

三

宗助は、彼の友人安井の妻を奪うという行為によって、現実世界に関わり、△暗い過去▽を担っていくのであり、小川三四郎が美禰子との関係の中で、担っていく△過去▽より以上に、激烈で、苦しい△暗い過去▽である。何故なら三四郎の△過去▽が△罪▽との関連の中で考えられなかったのに反し、宗助の△過去▽は△罪▽との関連の中に於て考えられるからである。また表現の曖昧さを厭わずに言えば、それは恰も、代助が平岡の妻の三千代を奪った行為で、担っていく△暗い過去▽の如くであるといえよう。「三四郎」と「門」の有機的関連性については既に述べたが、「それから」と「門」の有機的関連性は、当にそういった所に見られるのである。「それから」の中で設定されている、平岡、三千代、代助の三角関係は、この「門」に於ては、安井、御米、宗助の三角関係であり、「それから」に於ては、代助が平岡から三千代を奪うという行為に至る迄が主として描かれているのに対し、「門」は、宗助が御米を安井から奪ってから後が描かれているのであり、そういった所に、「門」が「それから」のテーマを継承していることの根拠を探ることができるのではないだろうか。

「それから」の代助は、三千代を奪ったことよって△暗い過去▽、いかえれば△罪▽を担った過去▽を担っているのであるが、その時点に於ける代助の不安な心理を、漱石は次の様に描写していた。

忽ち赤い郵便筒が眼に付いた。すると其赤い色が忽ち代助の頭の中に飛び込んでくるくと回転し始めた。傘屋の看板に、赤い蝙蝠傘を四つ重ねて高く釣るしてあつた。傘の色が、又代助の頭に飛び込んで、くる／＼と渦を捲いた。四つ角に、大きい真赤な風船玉を売つてるものがあつた。電車が急に角を曲るとき、風船玉は追懸て来て、代助の頭に飛び付いた。小包郵便を載せた赤

い車はつと電車と摺れ違ふとき、又代助の頭の中に吸ひ込まれた。烟草屋の暖簾が赤かった。売出しの旗も赤かった、電柱が赤かった。赤ペンキの看板がそれから、それへと続いた。仕舞には世の中が真赤になった。さうして、代助の頭を中心としてくさりくると焰の息を吹いて回転した。代助は自分の頭が焼け尽きる迄電車に乗つて行かうと決心した。(『それから』一七)

この様な描写から、 \wedge 赤 \vee という言葉が多用されている事が分る。 \wedge 赤い郵便筒 \vee 赤い色 \vee 赤い蝙蝠傘 \vee 真赤な風船玉 \vee 赤い車 \vee 暖簾が赤かった \vee 旗も赤かった \vee 電柱が赤かった \vee 赤ペンキの看板 \vee 世の中が真赤になった \vee と、僅か一頁足らずの文章の中に十回、 \wedge 赤 \vee という言葉が使用されているのであり、この事から、漱石が \wedge 赤 \vee という色を、単なる色の \wedge 赤 \vee としてだけでなく、この時の代助の心理状態を表わす言葉として、即ち、代助が陥つた不安を表わす言葉として用いているといえよう。換言すれば、この時点における代助は、 \wedge 赤い不安 \vee に囚われていたのであるといえよう。

何故にこの様な事を、私が問題にしたかという事は、「門」の主人公である宗助が囚われる不安、それが一体如何なる形に於て表現されているかという事を考慮の対象に入れれば、明白になるのである。「門」に於て、宗助が御米との初対面の直後の談話の事を回想する場面を漱石は次の様に表現している。

宗助は極めて短かい其時の談話を、一々思ひ浮べるたびに、其一々が、殆んど無着色と云つていゝ程に、平淡であつた事を認めた。さうして、斯く透明な声が、二人の未来を、何うしてあゝ真赤に塗り付けたかを不思議に思った。今では赤い色が日を経て昔の鮮かさを失つてゐた。互を焚き焦がした焰は、自然と変色して黒くなつてゐた。二人の生活は斯様にして暗い中に沈んでゐた。宗助は過去を振り向いて、事の成行を逆に眺め返しては、此淡泊な挨拶が、如何に自分等の歴史を濃く彩つたかを、胸の中で飽迄味はひつゝ、平凡な出来事を重大に変化させる運命の力を恐ろしがつた。(一四)

この文章から「それから」の不安を「門」が継承しているという事が分るといっては言い過ぎだろうか。「門」の、

漱石文芸中に於ける、特に中期三部作に於ける存在意義は「それから」的不安、△赤い不安▽の内実化という所にあると言えよう。そして「それから」の△赤い不安▽に対して、「門」の不安は、△赤い不安▽の内実化である△黒い不安▽という事が言えよう。

漱石が斯様に、人間の囚われる不安を色彩で表わしているのは、何も「それから」「門」だけでない。⁽¹⁾例えば中期三部作に限っても、「三四郎」の中に次の様な文章がある。

三四郎は寒いのを我慢して、しばらく此赤いものを見詰めてゐた。其時三四郎の頭には運命があり／＼と赤く映つた。三四郎は又暖かい布団のなかに潜り込んだ。さうして、赤い運命のなかに狂い回る多くの人の身の上を忘れた。(『三四郎』九)

小川三四郎は、作品的現在に於て、△大いなる未来▽を有している人間であり、△赤い運命▽という語によって示される様な不安は、「それから」の代助や、「門」の宗助が囚われる不安に対する、一つの予見の意味があるといえよう。漱石はこの中期三部作に於て、人間存在の内部に秘む具体的形象の困難な不安の心理を、赤、黒という色のイメージによって表現しようとしているのである。

それでは「門」で示される△黒い不安▽の世界をより具体的に言えば、どういえるだろうか。またそのような△黒い不安▽の世界に入り込んだ宗助は、どの様に彼の人生観を変革せしめていったのか、またいかねばならなかったのであろうか、更にまた△黒い不安▽の世界に宗助をして至らしめる人間となった御米との関係は、彼女との生活は、宗助にとって如何なる意味を持っていたのであろうか等の問題について、順を追つて考察したい。

宗助一人の事を評した言葉でないので、些かの問題があるにしても、「人に見えない結核性の恐ろしいもの」(一七)が自覚される世界が、△黒い不安▽の世界であるといえよう。また歯医者が宗助に言った、

「何うも斯う弛みまずと、到底元の様に繋る訳には参りませんと思ひますが、何しろ中がエソになつて居りますから」
「何しろエソエソと申しても御分りにならないかも知れませんが、中が丸で腐つて居ります」(五)

という語によつて、漱石は比喩的な形で宗助の囚われている不安の状況を表現している。この二つの文によつて「門」の△黒い不安▽の世界は、よりその実体を明きらかにしていくのである。何れも、病気に託しているが、漱石がこのような△結核性の恐ろしいもの▽、又△中が丸で腐っているエソ▽という病気を持ち出しているのは、宗助の囚われている不安が、彼にとつて克服不可能であることを暗に示しているといえよう。換言すれば、宗助は安井の妻御米を奪うことによつて、△徳義上の罪▽(二四)、△暗い過去▽を担つていたのであるが、そのような△罪を担つた過去▽から、彼が到底免れえない事を、また正面切つてその△罪を担つた過去▽に立ち向つても克服できぬ事を示しているといえよう。従つて△黒い不安▽の世界の中の住人である宗助は、希望とか、夢とか、理想を一切もぎとられている人間であるといえるであろう。ここで宗助は、彼がかつて有していた△大いなる未来▽を捨て去らざるを得なくなつたのである。彼はさういった意味で、確かに△過去を有っている人▽(四)なのである。だから宗助が△昔の自分が再び蘇生▽(同)したような弟の小六をみて、△自分の勝手に作り上げた美しい未来▽(同)を有っていると考えること自体、彼がかつての自分を客観視していることを物語っている。即ち自分が△大いなる未来▽を捨て、△過去▽を有つた人であることを逆の形で証明しているのである。弟小六の作品中に於ける存在意義は、宗助の小説的現在の位置の明確化という所に存したのであろう事は疑えない事実である。そして作品「門」はその様な前提条件を具備して始まるのである。

註(1) この事は「夢十夜」に於て、かなり重要な問題となるが、別の機会に詳述したい。

四

「門」は、△過去という暗い大きな窖の中▽（四）にいる宗助と御米夫婦の秋の日曜日の縁側での会話から始まる。宗助は、そこで御米と次の様な会話をする。それは、

「御米、近來の近の字はどう書いたつげね」と尋ねた。／

「近江のおほの字ぢやなくつて」と答へた。

「其近江のおほの字が分らないんだ」（一）

と始まり、

／宗助は脇で挟んだ頭を少し拾げて、

「何うも字と云ふものは不思議だよ」と始めて細君の顔を見た。

「何故」

「何故つて、幾何容易い字でも、こりや変だと思つて疑り出すと分らなくなる。此間も今日の今の字で大変迷つた。紙の上へちやんと書いて見て、ちつと眺めてゐると、何だか違つた様な気がする。仕舞には見れば見る程今らしくなくなつて来る。――御前そんな事を経験した事はないかい」

「まさか」

「己丈かな」と宗助は頭へ手を当てた。

「貴方何うかして入らつしやるのよ」

「矢つ張り神経衰弱の所為かも知れない」（同）

と続いていく。一見夫婦の何気ない会話の様であるが、この会話は「門」という作品を理解する上に於て、既に多く

の「門」論に於て問題にされていることによつても分る如く、かなり重要な意味を持っているといえよう。越智氏は、この会話に関連して、

「幾何容易い字でも、こりや変だと思つて疑り出すと分らなくなる。」という経験は多くの人のものであるが、この変哲のない宗助夫婦の生活もそうした晦渋なものを秘めているにちがいない。生活の背後にある危機が生活を暗くいることももちろんあるだろう。(1)

と指摘されている。確かに氏のいわれる通りであるが、この会話には、その事に関連しているが、もう一つ別の意味がある事を看過することはできない。それは分っている筈の「近」や「今」という字が分らないという事実の持つ意味である。(2) その事實は、宗助の、△罪を担った過去▽の中にいる彼の人生に対する態度を明確に示しているのである。宗助が忘れない事實である△罪を担った過去▽を忘却の彼方に追いやろうとするような逃避的な態度を示していることをこの会話は語っている。漱石は、このようなさりげない、夫婦の日常的な会話の中に於て、越智治雄氏にいわれる「生活の背後にある危機」を、いいかえれば、△罪を担った過去▽を背景に持つ危機を、宗助の人生に対する逃避的態度を意識的に表現しているのである。

このように考えれば、江藤淳氏の「門」が、やや逆説的にいうなら、『罪』の物語でなく、『罪』の回避の物語である。(3)とされる見解も首肯されよう。宗助は△自然の恵から来る月日といふ緩和剤の力▽(一七)によつて、また△凡ての創口を癒合するものは時日であるといふ▽(同)考えを抱いて、△平凡を分として▽(一八)生きていくのである。ともかく彼は△饗宴に招かれない局外者▽(一五)△酔ふ事を免かれた人▽(同)たることによつて、彼が御米と共に犯した罪、△結核▽△エソ▽のイメージする、克服しきれない△罪を担った過去▽から逃避しようとする

のである。このような宗助の人生に対する逃避的な態度を別の言葉で言えば、自己の△罪を担った過去▽に対して苦悩する魂を日常性の中に置くことによって、溶解しようとするような態度であるといえよう。また△月日という緩和剤の力▽△凡ての創口を癒合するものは時日▽△平凡を分▽という言葉によって表現されているような△日常性の論理▽によって動くことを強いられた人間として、この時期の宗助を考えることができるともいえよう。

江藤淳氏は、また

漱石が「罪」に迫られる宗助夫婦の住居を社会から殆ど絶縁された横丁の借家に定めた時、彼は同時に彼の内部にひそむ神秘的な愛への希求を語る「idyllic」の舞台を設定してしまっていたのではないか。作者は期せずしてあたえられたこの舞台の上に、自らの当初の計画とは背反した幸福な恋愛の物語―敢ていえば、実生活では求めて得られなかった彼の理想とする夫婦愛の物語を展開せずにはいない。⁽⁴⁾

と「門」を評されている。確かに「門」には江藤氏のいわれる如く、安井に対する罪故に、愛を保有している宗助、御米夫婦の生活が描かれているといえよう。それは、例えば、宗助、御米の夫婦を評した言葉「仲の好い夫婦に違なかつた。」(一四)「彼等にとって絶対に必要なものは御互丈で、其御互丈が、彼等にはまた充分であつた。」(同)「彼等の命はいつの間にか互の底に迄喰ひ入つた。」(同)△一つの有機体▽(同)△彼等は世間に疎い丈それ丈仲の好い夫婦▽(同)等によって明白である。漱石は罪故に、未来も希望も捨て、ただ△日常性の論理▽によって生きている二人の愛を丹念に描いているのである。だがしかし、ここで重要な事は、漱石は決してこの二人の愛を、言葉は些か曖昧であるが、絶対的な愛として描いていないという事実である。言葉の矛盾を恐れずに言えば、漱石はこの小説に於て夫婦愛を描いたことは事実であるが、故にまた、夫婦間の断絶をも描いているのである。そして宗助と御米の

△関係の断絶▽は、愛を背景としているが故に、よりリアリティを持っているのである。

漱石は恰も、罪を犯した人間の中にこそ、その罪故に夫婦の愛は保持しうるともいつている様である。彼の他の作品に、この「門」程じっくりとした夫婦の生活を描いている作品が無い事が、その事の一つの根拠になるだろう。だがしかし、このような彼として珍しい程の夫婦愛の小説の中に夫婦間の断絶を描写しているところに、作家としての漱石の偉大さが看取される。それにしても、このような事実は、彼があまりにも人生に対し絶望的な視方をしている作家であるということを語っていることにもなる。そしてそこにこそ一生夫婦間の断絶に苦悩して、傷ついていた漱石の△病んだ魂▽を覗い知ることができるといってはいい過ぎだろうか。

御米が、宗助との△関係の断絶▽を意識している具体的な例として、彼女の子供に関する△過去▽を挙げる事ができる。彼女は三人の胎児を失ってきた。そのような厳肅な事実の中で、彼女は次の如く考える。

斯う解釈した時、御米は恐ろしい罪を犯した悪人と己を見做さない訳に行かなかつた。さうして思はざる徳義上の苛責を分つて、共に苦しんで呉れるものは世界中に一人もなかつた。御米は夫にさへ此苦しみを語らなかつたのである。(二三)

この言葉程、彼女の夫宗助に対する断絶の意識を描いている所はないであろう。御米はその事で苦しむが、結局、夫に自己の苦しみを間接的な形で打ち明ける事によつて、ある程度癒されるのである。だがそのような事実を考慮に入れても御米の宗助に対する孤独の意識を否定するには些かの問題が残るといえよう。

また宗助に於て、御米との△関係の断絶▽はより明白であり、その事は安井到来の危機感にさらされた後、明らかなになつてくるが、それはともかくとして、宗助と御米との夫婦関係は、

宗助と御米の一生を暗く彩つた関係は、二人の影を薄くして、幽霊の様な思を何所かに抱かしめた。彼等は自己の心のある部

分に、人に見えない結核性の恐ろしいものが潜んでゐるのを、仄かに自覚しながら、わざと知らぬ顔に互と向き合つて年を過した。(一七)

であつたという事を正確に押えておく必要がある。このような描写からも、二人の愛が、△罪を担つた過去▽故のものであることが明白である。二人の愛は、△罪を担つた過去▽との積極的対決の中で、獲得され得たものではなく、△罪を担つた過去▽に触れないこと、もしくはそれからの逃避によつてのみ成立しているのである。前述の△日常性の論理▽に従うに事によつてのみ、二人の関係は、危機的な形に於てではあるが、保たれていたのである。

註(1) △門▽ 越智治雄 前掲書 一二四頁

(2) 土居健郎氏はその著「漱石の心的世界」(至文堂 昭和四四年六月)に於て、この事に関連して「實際この状態は精神医学でいう離人症の症状に似ていると考えることができる。というのは、最も確かであるべき筈の簡単な字の記憶について現実感が失われ、そのことで彼は強迫的に反芻しているからである。」(七六頁)と興味ある指摘をされている。

(3) 江藤淳著「夏目漱石」角川文庫 一一九頁 昭和四三年九月
 一一八頁 //

五

宗助は坂井から安井の話聞いた後、安井到来の危機感にさらされる。その時△日常性の論理▽の中に生きることによつて、△罪を担つた過去▽を回避しようとした自己の逃避的態度が如何に無力であつたかを痛切に感じた彼は、自己の人生観を抜本的に改革する必要に迫られる。宗助にとって第三期である。彼は、安井によつてもたらされたこのような苦しみを、決して妻の御米には打ち明けないのであり、それは、御米が子供に関する苦しみを宗助に明確に

は打ち明けなかったという事実より以上に重い意味を持っている。その時点に於て宗助は「羨やましい人のうちに、御米迄勘定しなければならなかった。」(一七)「其責任を自身一人で全く負はなければならない様な気がした。」(同)と考え、強く自己の孤独を意識するのである。もし宗助と御米の愛が完全であるなら、このような事が起り得る筈はないのである。

ともかく彼は△月日という緩和剤の力▽や△凡ての創口を癒合するものは時日▽というように、総て、時によって自己の犯した△罪▽から逃避しようとしていた態度の無意味さを、安井の話聞いた後の、自己の心的動揺によって知る。彼はそこで「今迄は忍耐で世を渡って来た。是からは積極的に人生観を作り易へなければならなかった。」(一七)と考え、△心の実質が太くなるもの▽ (同) を目ざす、宗助は、ここに至り、初めて△罪を担った過去▽からの回避ではなく、多少断言するには問題が残るが、△日常性の論理▽との訣別の中で、△罪を担った過去▽との対決を決意する。そしてその具体的行為として彼の参禅が位置づけられるのである。従って、

罪の意識をすでに忘却の彼方にやつた宗助には、それから救われる必要はなかった。要するに参禅は「希知」な自分をしつかりさせたという△精神的修養▽を目ざしたに過ぎない。⁽¹⁾

とされる遠藤祐氏の意見には従いがたい。そしてまた、例え「門」が江藤氏のいわれる「罪」の回避の物語」のムードを全編に漂わしていたとしても、この時点に於てのみ考えれば、必ずしも「門」を『罪』の回避の物語であると簡単に片付けられないといえよう。更にまたこのように考えた時、

鎌倉の禅寺へ行くなんか少し巫山戯てゐる。……作者はどの小説にもなぜこんな筆法が用ひるのであろうか。腰弁宗助の平凡生活だけでいいではないか。⁽²⁾

という正宗白鳥の意見は、あまりにも漱石の作品を自己流の文芸観の尺度で測っている意見であることが、以上述べてきた中で明きらかになった筈である。

宗助にとって、参禅行為は、老師から出された「父母未生以前本来の面目は何だ。」(一八)という質問にも、 Δ 日常の我 ∇ (同)、別の言葉でいえば Δ 日常性の論理 ∇ に生きていた自己を想起して答えられない事によって端的に示されている如く、「門の下に立ち竦んで、日の暮れるのを待つべき不幸な人。」(二一)という苦い自己発見をもたらす。参禅行為によって、自己の Δ 罪を担った過去 ∇ を克服しようとした事は、結局無意味であった。そこに彼の第四期が考えられる。遂に安井も出現しなかった。また小六の事も片付いた、自分自身も何とか役所を首にならずに済んだ、ともかく作品当初に於て未解決であった日常的な出来事は、「門」の作品の最後に於て、殆んど解決するのである。だがその中で解決しなかった事が一つある。それは参禅行為によって、自己の Δ 罪を担った過去 ∇ を克服することと失敗した宗助の心の在り方ではなかったか。

学生時代の宗助は、 Δ 大いなる未来 ∇ の中に生きていた。ところが安井から御米を奪って後は、 Δ 罪を担った過去 ∇ からの回避という形で、 Δ 日常性の論理 ∇ の中に生きていた。また安井出現の危機感にさらされた後の宗助は、参禅行為によって、 Δ 日常性の論理 ∇ との訣別の中で、 Δ 罪を担った過去 ∇ との対決を試みる。そして Δ 罪を担った過去 ∇ からの逃避から、 Δ 罪を担った過去 ∇ との対決の姿勢の中で、彼は御米との Δ 関係の断絶 ∇ を強く意識する。 Δ 罪を担った過去 ∇ からの逃避の中で、危うくも保たれた夫婦愛は、 Δ 罪を担った過去 ∇ との対決の中でもろくも崩れ去る。その時宗助はより重い不安に囚われる。彼は参禅行為以前より以上に、自己の Δ 罪を担った過去 ∇ の重さ、それを克服することの絶望さを、それが本来的に Δ 結核 ∇ Δ エソ ∇ によって示される治癒不可能な不安、 Δ 黒い不安 ∇

であることを、痛切な体験を通して認識した筈であり、そのような彼にとって、日常的な出来事が総て平穩無事に解決したとしても、その事は何ら彼の心の問題を解決することにはつながらなかった筈でなる。それは、

是に似た不安は是から先何度でも、色々な程度に於て、繰り返しなければ済まない様な、虫の知らせが何処かにあつた。(二二) という想念を宗助が持つことによつて明白である。

そのように考えた時、あの作品の最後の夫婦の会話は、熊坂氏の如く解釈するのが妥当であろう。私流に言えば、この会話は、御米が△春▽のイメージする、日常的な出来事の解決した事を考えているのに対し、宗助が△冬▽のイメージする、自己のさらされている不安の事を考えているのであり、二人の関係が断絶している事を明確に示しているのである。そして宗助は絶えず彼の△罪を担った過去▽によつて招来された△黒い不安▽にさらされ、生きて行かねばならないのである。ともかく、そのように考えた時、この会話は、あの有名な「道草」の最後に於ける、健三とお住の会話と実質的にそう遠い距離にあるとは思われない。

註(1) △「門」の世界―試論―▽ 遠藤祐 「文学」 昭和四二年二月号 日本文学研究資料叢書「夏目漱石」有精堂所収 二〇

五頁昭和四五年一月

(2) 正宗白鳥著「作家論」(一) 創元文庫 一九二頁 昭和二六年九月

(3) △春▽や△冬▽にこの様な深い意味を考えるのは、ある意味で客観的妥当性を欠くといえるかもしれないが、このように△春▽や△冬▽に意味を持たして考えるのは、この「門」という作品が、畑有三氏のいわゆる、「象徴性を基軸とする対照的手法」(△門▽畑有三「国文学」学燈社 一四卷五号 昭和四四年五月 九〇頁)によつて行われているからである。